

2025年1月17日

大阪公立大学

多文化社会を読み解く鍵は寛容さではなく不信感だった —約200年前の文書から見たオスマン帝国の新事実—

<ポイント>

- ◇聖職者を利用した非ムスリムの統治制度の成り立ちを、オスマン帝国の文書史料から調査。
- ◇非ムスリムへの不信感の高まりと統制の強化が、「ミット制」に繋がったことが明らかに。

<概要>

1300年頃～1922年にかけて存続したオスマン帝国には、支配者層のイスラーム教徒だけでなく、ギリシア人やアルメニア人、カトリック、ユダヤ教徒などの非ムスリムも数多く共存していました。非ムスリムの統治には、各宗派集団の聖職者を利用する仕組みが用いられており、これまでオスマン帝国の寛容な政策の象徴と見なされてきました。しかし、こうした仕組みがどのように発展したのかは明らかになっておらず、オスマン帝国史研究の謎の一つでした。



イスタンブールのガラタ地区にある
アルメニア教会

大阪公立大学大学院文学研究科の上野 雅由樹准教授は、オスマン帝国でギリシア独立戦争が起こった1820年代に着目し、文書史料を調査。後の研究者が「ミット制」と呼ぶことになる、聖職者を利用した統治制度は、ギリシア人の反乱によって帝国上層部に広まった非ムスリムへの不信感と、彼らに対する統制強化の産物であったことが明らかになりました。

本研究成果は、2025年1月10日に国際学術誌「*Comparative Studies in Society and History*」にオンライン掲載されました。

<上野 雅由樹准教授のコメント>

今回の結論につながる調査は、前に書いた論文でよく分からなかったことをもう少し調べてみようと思って気楽に始めたものでした。その結果として、これまでさまざまな研究者が別々に扱ってきたいくつかの事象の間に、関連性があったという予想外の発見をすることができ、それを自分なりにまとめることができたことが嬉しかったです。

<掲載誌情報>

【発表雑誌】 *Comparative Studies in Society and History*

【論文名】 Purifying Istanbul: The Greek Revolution, Population Surveillance, and Non-Muslim Religious Authorities in the Early Nineteenth-century Ottoman Empire

【著者】 Masayuki Ueno

【掲載 URL】 <https://doi.org/10.1017/S0010417524000343>

<研究の背景>

オスマン帝国（1300年頃～1922年）は、現在のバルカン半島から西アジア・中東地域、北アフリカに広大な領土を有し、文化的背景の面で多様な人々を抱えていました。その歴史の大半を通じてオスマン帝国の支配層はイスラーム教徒だった一方で、統治下にはキリスト教徒やユダヤ教徒といった非ムスリムも数多く居住していました。これまで研究者の間では、オスマン帝国が非ムスリムを統治するために、聖職者を利用する仕組みが歴史の中で形づくられていったと理解されてきました。しかし、帝国と非ムスリムの関係性がどのように発展したのかは十分に明らかにされてきませんでした。

<研究の内容>

本研究では、オスマン帝国領でギリシア独立戦争が生じた1820年代に注目し、オスマン帝国が残した文書史料を調査しました。現在のギリシアは、1830年に独立するまでオスマン帝国の統治下にあり、その独立につながるギリシア人の反乱は1821年に始まります。この反乱がオスマン帝国に与えたインパクトは、これまで十分に理解されてきませんでした。1820年代の文書史料から、帝国上層部がこの反乱を危機と捉え、帝都イスタンブールの治安を守るのに注力していた様子が分かりました。なぜなら、イスタンブールの人口の半数程度はキリスト教徒が占めており、この機会に乗じてロシアが戦争をしかけてきて、イスタンブールのキリスト教徒が暴動を起こすと、体制の崩壊に繋がると彼らは考えたからです。

帝国上層部は、イスタンブールでさまざまな治安対策を講じる中で、統治下の人々をしっかりと把握し、管理しようという傾向を強めていきます。これは結果として、帝国内での人々の移動を規制する内国旅券制度や人口調査の導入に繋がりますが、そうした制度を運用するにあたって、ギリシア人やアルメニア人などの非ムスリムの身元を把握するためには、彼らの聖職者に頼らざるを得ませんでした。このようにして、聖職者を利用した統治の仕組みが出来上がると、より人口の少ない非ムスリム集団、すなわちラテン臣民やカトリック、ユダヤ教徒に対しても、帝国政府が公認した首長を任命するという方式が拡大しました。

非ムスリムの聖職者を統治に利用してきたという見方は帝国崩壊後、研究者の間で「ミットレト制」と（誤解を招く形で）呼ばれ、オスマン帝国の寛容な政策の象徴と見なされてきました。しかし本研究により、実際には寛容の産物や自治の付与ではなく、非ムスリムに対する不信感の高まりと、彼らに対する統制の強化の産物であったことが明らかになりました。また、オスマン帝国の研究は、イスラーム教徒やギリシア人、アルメニア人、カトリックやユダヤ教徒などの集団毎に行われる傾向が強く、その結果、同じ時代に生じた事象の関連性が見落とされがちです。本研究により、ギリシア独立戦争、内国旅券制度の導入、人口調査の導入、ラテン臣民の代表者の任命、カトリック共同体の独立、ユダヤ教徒の首席ラビの公認といった事象の繋がりを初めて解明することができました。

<期待される効果・今後の展開>

今回の発見は、オスマン帝国における非ムスリムの処遇に関する理解を見直す近年の一連の研究の中で、別々に研究されてきた近世（16世紀から18世紀）と近代（19世紀から20世紀初頭）の成果を架橋する意義を有しています。そのため、オスマン帝国における非ムスリムの処遇を通時的に理解する議論につながることを期待できます。

<資金情報>

本研究は、JSPS 科研費（20KK0266、23K00870）の助成を受け実施しました。

【研究内容に関する問い合わせ先】

大阪公立大学大学院文学研究科
准教授 上野 雅由樹（うえの まさゆき）
TEL：06-6605-2397
E-mail：m_ueno-lit@omu.ac.jp

【報道に関する問い合わせ先】

大阪公立大学 広報課
担当：竹内
TEL：06-6967-1834
E-mail：koho-list@ml.omu.ac.jp